

群馬大学地域貢献事業・群馬県立歴史博物館協力  
群馬大学総合情報メディアセンター中央図書館荒牧祭特別展示

# 群馬県の古墳発掘の父 尾崎喜左雄博士展

Part 2

～群馬県内の古墳発掘・調査の歴史を識る～

尾崎喜左雄博士(群馬大学名誉教授)は、昭和21年から45年と長年にわたり県内の古墳発掘調査に携わり、県内300以上の古墳の調査を行った。国内でも有数の古墳王国である群馬の考古学の礎を築いた研究者である。尾崎博士の長年の研究成果は、現在まで群馬大学教育学部に保管されており、「考古遺物・記録・写真」の3点が揃った調査資料は全国でも類を見ない貴重な資料であると専門家から評価されている。今回は、渋川地域の古墳に焦点を当てて展示を行う。

日時

11  
2017

11<sup>土</sup>・12<sup>日</sup>

9:00~17:00

入場  
無料

群馬大学総合情報  
メディアセンター中央図書館1F

## 11月11日<sup>土</sup> トークイベント

13:00~13:20

「ギャラリー解説」

深澤敦仁氏(群馬県立歴史博物館 教育普及係長)

13:30~15:00

トークショー「尾崎喜左雄先生と考古学」

栗原和彦氏(元九州歴史資料館 参事・群馬大学卒業生)

右島和夫氏(群馬県立歴史博物館 館長・群馬大学卒業生)

15:30~15:50

「ギャラリー解説」

深澤敦仁氏(群馬県立歴史博物館 教育普及係長)

【お問い合わせ】

群馬大学総合情報メディアセンター中央図書館  
〒371-8510 群馬県前橋市荒牧町4-2

TEL.027-220-7185 FAX.027-220-7184

URL : <https://www.media.gunma-u.ac.jp/>

# 尾崎喜左雄の 考古学研究と渋川地域

右島和夫 (群馬県立歴史博物館 館長)



## 古代史から**考古学**へ

渋川地域(平成の大合併後の地域)は、尾崎喜左雄の考古学研究、取りわけ古墳・古墳時代研究にとって枢要のフィールドの一つだった。尾崎の代表的著作である大冊の『横穴式古墳の研究』吉川弘文館 1966(東京大学に提出された博士論文『古墳から見た東国文化』の前半部分をなす)を紐解いてみると、全3篇から構成される全体のうちの第二篇を「榛名山の一峯二ッ岳の爆裂とその前後期における横穴式古墳の研究」に当てている。全719頁のうちの約250頁を割いていることになる。なにゆえに、「榛名山二ッ岳」だったのだろうか。

このことは、『横穴式古墳の研究』の「序」を読むと、その事情がよくわかる。尾崎は元々古代史研究を志していたが、恩師黒板勝美の指示によって、昭和11年、東京帝国大学副手から群馬県嘱託(社寺兵事課。現在の教育委員会文化財保護課に近い機能を果たしていた)に採用され、初めて古墳・古墳時代研究と出会うことになった。自ら希望して考古学研究に身を置くことになったわけではなかったのである。そのこともあって「古墳から古代史の資料を得る」という視点に活路を見出していくことになる。群馬県地域の場合、古代史研究の基礎となる文字に記された史料がほとんどないわけである。一方、全国的にも屈指の古墳県であったわけだから、古墳を考古学的に分析し、正しく年代が付与できれば、古代史研究の重要な資料になりうると考えたのである。

## 榛名山噴火と**古墳**

古墳との関係で榛名山の火山噴出物層の存在に最初に気づいたのは、岩澤正作、福島武雄らによる昭和4年の上芝古墳(旧群馬郡箕輪町所在、現高崎市)、同じく保渡田八幡塚古墳(旧群馬郡上郊村所在、現高崎市)の調査においてであった。なお、この当時認識したのは、榛名山の2つの大きな火山噴火のうちの6世紀中頃とされる噴火(Hr-FP)の方で、5世紀末ないし6世紀初とされる噴火(Hr-FA)の存在には気づかなかった。こちらの噴火の存在が認識されるようになるのは昭和47年以降のことである。

群馬県に赴任した尾崎は、岩澤らによるこの火山噴出物の存在指摘の成果にいち早く注目した。尾崎の考古学研究が本格化するのは、終戦直前に群馬師範学校教授に迎えられ、さらに戦後に群馬大学学芸学部教授(戦後、師範学校から移行した)になってからである。昭和20年代、数多くの古墳調査に従事していることが、本格的に古墳・古墳時代研究に邁進していつていることをよく物語っている。その中で、古墳に正しく年代を付与するという意味では、検討しようとする古墳が火山噴出物層の上にあるのか、下にあるのかということは、たいへん魅力的なことだったわけである。自然現象が介在しているわけだから、火山噴出物層との上下関係は、全く間違いのない、絶対的な新旧関係を導き出すことを可能にした。

## 渋川市域での**古墳調査**

尾崎が自らの発掘調査の中で、榛名山の軽石層の存在を確認したのは、昭和22年の赤城村津久田遺跡の調査においてだった。古墳時代の竪穴住居が1.5~2mの厚さで覆っていたからである。このような中で、噴火の給源の問題、噴火の方向性の問題等に関心を持つようになったことがわかる。旧渋川市、子持村、赤城村、昭和村、沼田市方面の遺跡のあり方がチェックポイントになると考えたからである。

最初古墳調査は、渋川市虚空蔵塚古墳の調査だった。今日の考古学的区分に従うなら、本墳は、硬質の石材を加工した切石積石室(尾崎は「截石



尾崎喜左雄著「横穴式古墳の研究」

切石積石室」と命名した)で、終末期古墳に属するものである。調査時点では、群馬県の他地域に所在する前橋市総社古墳群の宝塔山・蛇穴山古墳、高崎市山ノ上古墳の存在が念頭にあったから、虚空蔵塚に対する上記に近い位置づけは、当然踏まえていた。調査の主眼は、横穴式石室の調査にあったが、調査の最終段階で、石室の床面下の断ち割りを行い、当時の地表面が軽石層であることを確認している。

それから程ない昭和29年、中学校教諭の須田武雄の通報により、今度は2m近い軽石層ですっぱり埋まる旧白郷井村伊熊古墳の調査となった。現在、40基以上の古墳が埋没していることが明らかになっている渋川市宇津野・有瀬古墳群の最初の調査である。引き続き、昭和31年には、伊熊古墳の隣接地におけるソイルマークを確認した中学校教諭生方稷衛の通報により、有瀬1号墳、翌年には有瀬2号墳の調査を行い、全国的にも希有の完存する古墳の調査事例となった。

一方、虚空蔵塚古墳の近接地では、切石と自然石を併用している横穴式石室である金井古墳が調査され、虚空蔵塚と同様に軽石層直上に構築されていることが確認された。

このようにして、軽石層の上下の古墳の調査事例が集積されてきた結果、横穴式石室の構造的特徴自体の時期的差異が明らかになっていき、古墳(横穴式石室)の編年的研究を追究していく基礎が整ってきた。大きな枠組みとしては、軽石層下の古墳の横穴式石室が自然石使用の袖無式石室で、軽石層上のそれが切石使用(切石・自然石併用もある)、両袖式石室であった点である。

ところで、昭和37年、竪穴式系の主体部である渋川市坂下町古墳群の調査は、重要である。当時、主体部が竪穴式系であることから、軽石層上下の横穴式古墳よりは古く位置づけられるが、それ以上に分析は深化しなかった。ただし、この調査から程なくして行われた同じ竪穴式系の渋川市東町古墳の調査は、丹念な調査が実施されたゆえに、近年注目を集めているHr-FA噴火以前の渋川地域について検討してゆく上で調査的価値は高い。

## 『古墳のはなし』から『**横穴式古墳の研究**』へ

これまで見てきた渋川地域における尾崎の古墳調査は、昭和20年代に精力的に行われたのがよくわかる。渋川市域での一連の調査が進行していた時期に、尾崎の最初の古墳の著書が出版されている。『古墳のはなし』世界社 1952である。これを読んでみると、この段階で、尾崎の体系的な古墳研究の構想が出来上がりつつあったことがわかる。博士論文である『古墳から見た東国文化』、あるいは『横穴式古墳の研究』に集約されていった一大研究の細目が出揃っていたからである。

あとは、『古墳のはなし』で示された各見通し・構想について、資料的集積(古墳調査事例を増していく)をはかり、検討を厳密なものにしていくだけだったと言っても過言でない。尾崎が渋川地域を俎上に挙げて歴史的検討を行った著作がある。『北群馬・渋川の歴史』北群馬渋川の歴史編集委員会 1971である。ここでは、「一 古墳文化」と「二 伊香保神社」の章を執筆している。平成5年に刊行された『渋川市誌 第2巻』1993とともに、渋川地域の古墳時代を考えていく上で基本文献となっている。



尾崎喜左雄著「古墳のはなし」

## 渋川地域の古墳時代の**新局面**

昭和57年に始まるHr-FP層下の黒井峯遺跡の調査、平成24年11月の甲を着た古墳人の発見に始まるHr-FA層下の金井東裏・金井下新田遺跡の調査は、渋川地域の古墳時代の評価を一変させた。火山灰層下、火山軽石層下に眠る歴史世界が、日本の、あるいは東アジアの歴史の見直しを大きく迫る必要性が出てきたからである。その出発点になったのが、尾崎による当該地域の基礎的研究であったことをもう一度再確認する必要がある。また、尾崎の著作、あるいは考古資料の再検討をする中から、重要な事実が見出せるものと思われる。



北群馬渋川の歴史編集委員会『北群馬・渋川の歴史』

# 尾崎喜左雄博士と 渋川地域の古墳

尾崎喜左雄博士による群馬県での古墳調査は、昭和23年7月の鏡手塚古墳（前橋市粕川町）での発掘調査に端を発しますが、渋川地域の古墳調査は昭和27年6月に実施された虚空蔵塚古墳（渋川市渋川）の測量調査から始まりました。

その後、昭和29年10月の伊熊古墳（渋川市上白井）、昭和31年の有瀬1号墳（渋川市上白井）や金井古墳（渋川市金井）、昭和32年の有瀬2号墳（渋川市上白井）、昭和36年の十二山古墳（渋川市中村）や宮田畦畔遺構（渋川市赤城町）、昭和37年の坂下町古墳群（渋川市渋川）や館野遺跡（渋川市中郷）、昭和40年の東町古墳（渋川市渋川）など、20を超える古墳や古墳時代遺跡の調査を昭和40年代前半までに実施してきました。

これらの発掘成果は、群馬県古墳時代研究の基盤となっていますが、そのことに加え、金井東裏遺跡や金井下新田遺跡（ともに渋川市金井）など近年の発掘成果の研究分析にも影響をあたえるような、色褪せることのない重要な価値を持っています。 （深澤敦仁）



発掘調査前の伊熊古墳



十二山古墳の発掘調査風景

2時20分 尾崎先生の説明をうける (1.2年生)  
 2時50分 平板測量はじめる。(福田 内田 松之)

3時25分 休む。

3時40分 青柳の倉庫 (3月10日撮影) 奥内2.2m x 2.2m  
 水汲みより奥壁石の位置を正確に把握。和洋石の9.5m x 1.5m x 0.5mの石を6.1m x 6.2mの間に積み重ねる。石の重さは約1.5トン。石の重さは約1.5トン。石の重さは約1.5トン。

4時 尾崎先生が見える。土がめくれている。墓道の前は「オトレンチ」の様に砂質層の下に浮石が見られる。

4時30分 作業終了。相沢 福田 内田 青柳の諸君が帰り、今夜の泊りは5人。

5時 平板測量 (トレンチの外形 墓線 石垣地)。オトレンチ 寄石の根石が現れる。

6時 10時20分 四面整理 明日の調査にそなえる。  
 11時15分 寝る。

十二山古墳の発掘調査記録メモの一部

# 尾崎喜左雄博士と 積石塚

東国における古墳時代渡来文化に関する研究は、ここ20年間で飛躍的に進展していますが、この領域の研究対象として重要視される遺構のひとつに「積石塚」が挙げられます。

坂下町古墳群は、昭和37年3月に発掘調査された積石塚を主体とする古墳群です。6基の積石塚が検出されていますが、うち6号墳は、一辺4.8m x 4.45mの積石塚であり、埋葬施設には竪穴式小石塚を採用しています。また、1号墳からは、埋葬された被葬者の全身骨格が出土しました。

東町古墳は、昭和40年7月に発掘調査された一辺約5mの方形積石塚です。墳頂部には埴輪列が確認されており、その内側には、竪穴系埋葬施設2基が並存しています。

いずれも火山灰（榛名二ツ岳渋川テフラ (Hr-FA)）に覆われており、5世紀後半の築造と考えられます。近年の金井東裏遺跡や金井下新田遺跡での発掘成果から、渋川地域の渡来文化の色濃さが鮮明化しています。そして、ここに挙げた古墳の発掘成果からは、昭和30年代後半から40年代初頭において、すでに渡来文化の要素がこの地に姿を現していたことがわかります。 （深澤敦仁）



坂下町1号墳の埋葬施設内からの全身骨格



坂下町6号墳の全景



東町古墳の全景

1965.5.31.  
 尾崎先生、学生：川合 進彦 とて 渋川市東町にある  
 軽石に囲われている古墳を見学に行く。  
 昼頃、渋川市教育委員会へ寄る。(金食)

渋川中学校で内閣ハフをやる。

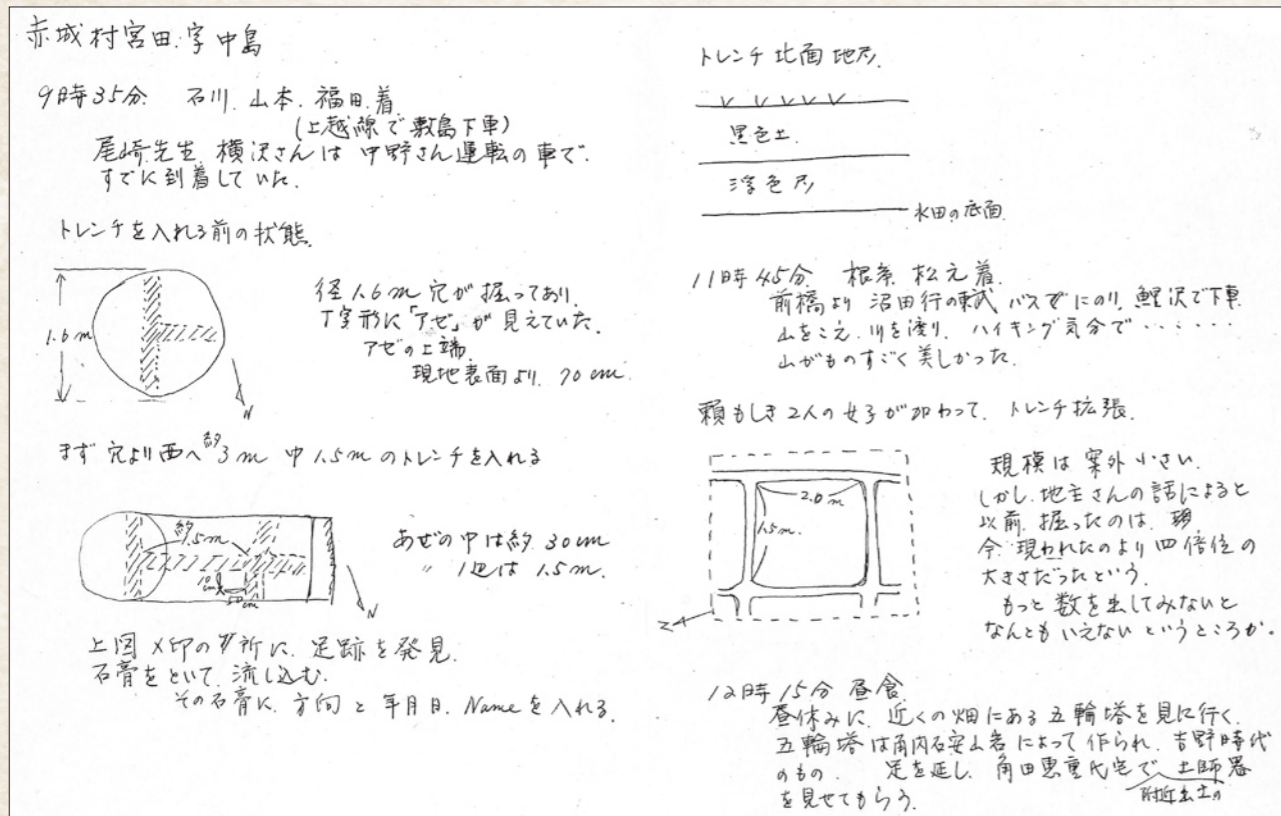
朝顔形内前埴輪 6個  
 地盤2.0(最大)と現場へ  
 この2.0mは、敷き石の下の埴輪の層でできている。  
 連絡1.5m、墓であることがわかる。敷き石の層の厚さは  
 5cmから10cm程度で、調査は1.5m以内。  
 墓の別荘に並行して敷き石の層の厚さは、調査は1.5m以内。

東町古墳の発掘調査記録ノートの一部

# 尾崎喜左雄博士と軽石埋没の水田・畠

宮田畦畔遺構は、昭和36年4月に発掘された古墳時代遺跡です。地元民からの「地表下から田のクロのように思われるものが出た」という情報提供に基づき、榛名山が6世紀前半に噴火した際の降下軽石（榛名二ツ岳伊香保テフラ（Hr-FP））下に存在する遺構が調査されました。当時はまだ、水田が軽石によって埋没していることや所謂「小区画水田」の存在認識は全くなかったため、調査成果の考察では「水田」と判断することには慎重を期しています。しかし、今日的視点からはこれらが、「古墳時代小区画水田」であることは明らかです。そして、このことを正確に記録化したこの遺跡の調査は群馬県の考古学史上、極めて重要な発掘と言えます。

館野遺跡も、榛名二ツ岳伊香保テフラ（Hr-FP）によって埋没した古墳時代遺跡です。昭和37年に発掘されたこの遺跡からは、群馬県初例と考えられる古墳時代畠の存在が確認されています。このほか、子持勾玉などの祭祀遺物が数多く発掘されました。のちに「日本のポンペイ」として注目されることとなる黒井峯遺跡と同等の保存状況の良さをもつ遺跡の片鱗が、館野遺跡で姿をあらわしていました。（深澤敦仁）



宮田畦畔遺構の発掘調査記録ノートの一部



館野遺跡で検出された軽石（Hr-FP）直下の畠



館野遺跡での軽石（Hr-FP）の堆積状況

# 尾崎喜左雄博士と軽石埋没の古墳

渋川地域には、軽石に埋没した古墳の存在が数多く確認されていますが、尾崎喜左雄博士による伊熊古墳、有瀬1号墳及び2号墳の発掘は、その最も初期の発掘事例です。

有瀬1号墳は、昭和31年1~2月に発掘調査された墳丘径7.4mの円墳です。また、有瀬2号墳は、昭和32年1月に発掘調査された墳丘径14mの円墳です。ともに、軽石（榛名山二ツ岳伊香保テフラ（Hr-FP））で埋没した6世紀前半に築造された古墳であることが判明しました。（深澤敦仁）



有瀬1号墳の軽石埋没状況



有瀬1号墳の墳頂部検出状況



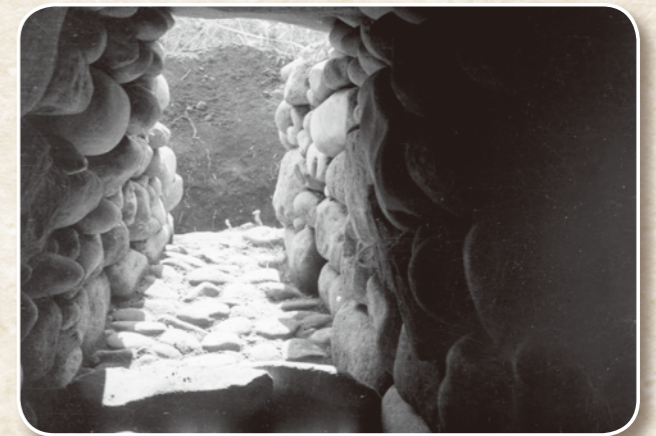
有瀬1号墳での円筒埴輪列の出土状況



有瀬1号墳の軽石埋没状況



有瀬1号墳での円筒埴輪列の出土状況



有瀬1号墳の横穴式石室（奥壁側から撮影）

# 尾崎喜左雄博士と終末期古墳

渋川地域には7世紀に築造された古墳（終末期古墳）が数多く存在しますが、尾崎喜左雄博士はこれらの古墳調査にもいち早く着手していました。

虚空蔵塚古墳は、墳丘径約13mの円墳です。昭和26年6月に実施された測量調査によって、墳丘規模と截石切組積石室の詳細が明らかにされました。

金井古墳は、墳丘径約14mの円墳です。昭和31年8月に実施された発掘調査によって、墳丘規模と前庭部を有する横穴式石室の詳細が明らかにされました。（深澤敦仁）



測量調査当時の虚空蔵塚古墳



金井古墳の発掘調査風景

## 「尾崎喜左雄博士展 Part2」の開催について

総合情報メディアセンター特別展示「尾崎喜左雄博士展 Part2」にお越しいただき、ありがとうございました。群馬県の古墳発掘の父と称される尾崎先生は、昭和24年から群馬大学教授として県内およそ300の古墳調査を行われ、国内でも有数の古墳王国である群馬の考古学の礎を築いた研究者です。尾崎博士の「考古遺物・記録・写真」の3点が揃った調査資料は、全国でも類を見ない貴重な資料と評価されています。本展は、群馬大学地域貢献事業として、群馬県立歴史博物館の全面協力のもと開催することができました。

多くの皆様方にご協力をいただきましたこと、厚く御礼申し上げます。

総合情報メディアセンター長 田中 麻里

群馬大学地域貢献事業・群馬県立歴史博物館協力

群馬大学総合情報メディアセンター中央図書館荒牧祭特別展示

「群馬県の古墳発掘の父・尾崎喜左雄博士展 Part2 ～群馬県内の古墳発掘・調査の歴史を識る～」

平成29(2017)年11月11日 発行

発行 群馬大学総合情報メディアセンター 編集協力 群馬県立歴史博物館

〒371-8510 群馬県前橋市荒牧町4-2

電話 027-220-7185 URL: <https://www.media.gunma-u.ac.jp/>